

『新編武蔵風土記』に見る飯能縄市の風景

尾崎 泰弘

この挿絵は、江戸時代の地誌である『新編武蔵風土記』に「飯能縄市之図」という標題が付けられたものです。日常は農業に従事し、交代で日光東照宮の火の番を務めた八王子千人同心は、江戸幕府の地誌編纂事業を担当した地誌調所からその一部を委託され、文政 3(1820)年 6 月に入間川沿いを、同年 8 月に高麗川流域を、さらに翌 4 年 4 月から 5 月にかけて高麗川上流及び名栗川中流域を現地調査し、それを基に草稿を書きました。つまり、この図は文政 3 年頃の飯能の市の様子を描いたものと考えられます。



「飯能縄市之図」
『新編武蔵風土記』浄書稿本
国立公文書館蔵

画角は南西方向からの俯瞰で、左手に飯能河原へと下りていく道、中ほどには高札場がありそこから高麗横丁が分岐しています。そして現在の「広小路」に突き当たると(中央通りが拡幅され東飯能駅まで貫通するのは昭和 15(1940)年 5 月のことです)、メインのルートはそこを左に曲がり現在の飯高通りを進み、さらに右に折れて前田へと向かっています。また家並みを見てみると通りに面した北側の商家には短い下屋(庇)が付属し、この様子は明治初期に撮影された宮内庁書陵部所蔵の「武州高麗郡飯能町之景」と題された写真と共通します(この写真は、現在インターネット

ト上の宮内庁「書陵部図書寮所蔵資料目録・画像公開システム」で閲覧できます)。

注目されるのは、広小路のところにある大きな木です。樹冠の形から樺や榎のように見えますが、これだけの高さがあれば周辺の村からも眺めることができ、飯能の市の場所を示すランドマークとなったのではないのでしょうか。

一方で市日にやってきた商人たちが商いを行う、商家と通りの間の「庭」と呼ばれる空間は描かれていません。描写が複雑になるため省略したのかもしれませんが、それを除いても意外と忠実に描かれているような印象を受けます。

実は飯能の市が「飯能縄市」と呼ばれていたというのは、この『新編武蔵風土記』くらいしか出てきません。この縄市という名称も当時どこまで一般的に使われていたかははっきりしないのです。

【参考文献・WEB サイト】

重田 正夫・白井 哲哉編『新編武蔵風土記稿を読む』 さきたま出版会 平成 27(2015)年 1 月
飯能市立博物館 図録『特別展 飯能縄市—近世の市と市街地の発展—』 令和 3(2021)年 10 月
宮内庁「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/>